クレナイの街

作・小佐部明広

【登場人物】
市長
議長
秘書

弁護士
医者
刑事

工場長
工員
漁師
記者
旅人

先輩芸人
後輩芸人／教師

【場所】
クレナイの街

第一幕

1．森

クレナイの街から少し離れた森。

足の悪い老人・市長が、杖を持ちながら倒れている。
そこに、カバンを背負った旅人が通りかかる。
旅人はそのまま市長を踏んでいく。
市長の短い悲鳴が聞こえる。

旅人、何か声が聞こえたと思い、辺りを見回したり、空を見たりする。
あたりを伺いながら数歩歩き、また市長を踏む。
また、市長の悲鳴が聞こえる。

旅人　誰？
市長　わしだ、
旅人　（あたりを見回すが見えない）
市長　ここだ、地面だ、
旅人　（見つけて距離をとる）……そういう遊びですか？
市長　そういう遊びに見えるか？
旅人　見たことないです。
市長　腹が減って倒れた。なにか、食わせてもらえないか？　いや、
　その前に、まず起こしてくれ、
旅人　ええ、（起こす）どうぞ。

旅人は食料をさしだし、市長は無言でそれをむさぼるように食べる。

旅人　……なぜこんなところに？
市長　クレナイの街に行こうと思ってな、
旅人　え？
市長　なんだ。
旅人　私もです。
市長　おお、そりゃ好都合だ。（手を広げる）
旅人　……嫌ですよ？
市長　まだなにも言ってない。
旅人　おぶれとか言うんでしょ。
市長　よくわかったな。
旅人　わかるでしょう。
市長　案ずるな。代わりと言っては何だが、わしの武勇伝を、
旅人　聞かなくていいです。
市長　あれは１２年ほど前の話だ。わしはあの街で一時代を築いた。
旅人　（少し聞く気になる）
市長　あの時代はよかった。こんなバカデカイ兵器工場があって、
　金も物も溢れてた。わしはな、愛人を１３人も囲ってた。
旅人　奥さんがかわいそうですね。
市長　病気で死んだ。
旅人　……ほかのご家族は？
市長　娘は自殺した。あの街のやつらのせいで。くそっ！
旅人　……。
市長　誰のおかげであの街が栄えたと思っているんだ、わしは何一
　つ間違っていなかった、そのわしを、あいつらは追い出した。

旅人　病気が出始めた時期ですか。
市長　知ってるのか。
旅人　私、小説を書いてるんです。
市長　ほお。
旅人　クレナイの街のことを書いてるんです。いろんな人に話をき
　いてて、
市長　ふむ。
旅人　よかったら、お話きかせてくれませんか。
市長　嫌だ。
旅人　……。
市長　だって、さっき聞きたくないって言ったもんな？
旅人　（食料を奪って去ろうとする）
市長　話す、話すから、
旅人　（立ち止まる）
市長　街まで案内してくれ、それが条件だ。
旅人　立てます？
市長　ああ、

　市長、旅人の手を借りて立ち上がる。

市長　一度会ったことがあるか？
旅人　さあ。
市長　わしを知らんか？
旅人　どうでしょう。
市長　わしのことを知らない奴なんかいなかった。このわしが、あ
　の街を生まれ変わらせた。そうだ。今でもありありと蘇るぞ。懐

かしい。あれは今から、１２年ほど前のことだ！

音楽。

２．酒場

工場長、工員、漁師、先輩芸人、後輩芸人が酒を飲んでいる。
離れたところで、弁護士も静かに飲んでいる。
盛り上がっている中、旅人と記者が入ってくる。

工場長　おう、こっち来な！　誰だそいつ？
記者　旅人さんだってさ。
工場長　おー珍しいね！
記者　飲み屋がないか聞かれたから連れてきた。じゃ。
工場長　帰んの？
記者　ああ、また。
工場長　おう！

記者は去っていく。

工場長　（旅人に）こっちこっち、今面白いもん見られるから、
旅人　どうも……、
先輩芸人　さて、新しいお客様も増えたということで、
工場長　早くやれ！
先輩芸人　私のオハコ、猫ダンスをお披露目しましょう。

三人、盛り上げる。

先輩芸人　音楽！

後輩芸人の発する音楽を背景に、
猫のような踊りを踊る先輩芸人。
踊りはだんだん激しくなり、最後はもだえ苦しむように、

先輩芸人　ニャー！！

と叫んで、バタッと見事に倒れる。

後輩　はいっ！

三人は盛り上がる。

工場長　ブラボー！
旅人　あの、え、大丈夫ですか、あの人、

先輩芸人がムクッと起き上がり、旅人はびっくりする。
三人はまた盛り上がる。
先輩芸人が帽子を差し出し、客は金を入れていく。
弁護士も一応拍手している。

工場長　（財布から無造作に１０枚ほど札を出し）持ってけ泥棒！

先輩芸人　ありがとうございます！
旅人　（金を出そうかどうか躊躇している）
工場長　あーいいよいいよ、（先輩芸人に）こいつの分だ！　ありがたく受け取れ！

三人はまた、声をあげて盛り上げる。
先輩芸人は弁護士の方にも帽子を差し出し、弁護士は金をいれてやる。
その間に、工場長が旅人に話しかけている。

工場長　旅人さんなんだって？
旅人　（うるさくてきこえない）え？
工場長　旅人？
旅人　（うるさくてきこえない）え？
先輩芸人　ありがとうございました。またいつかお会いしましょう。

先輩芸人と後輩芸人は去っていく。

工場長　ま、低俗な芸ですよ。だがそれがいい。旅人さんなんだって？
旅人　あ、はい、自分探しの旅をしてるんです。
工場長　ほー、
旅人　自分の街に不自由はなかったんですが、もっと外の世界も知りたくて。
工員　この街ははじめてなんですか？
旅人　はい。
漁師　いい街ですよ、ね、工場長？

工場長　（いびきをかいている）
工員　（笑って）悪い人じゃないんです。
旅人　いい街なんですね。
漁師　そうなんですよ、工場が建って、金がもうわーって、つまり、（工員に）俺口下手なんだよ。
工員　くれないんですよ。
旅人　はい？
工員　クレナイの街は、この時期には夜が来ないんです。日が暮れない街で、クレナイの街。
旅人　ああ、どうりでずっと明るいと、

市長が現れる。

市長　どうも、失礼。
工員　市長、お疲れ様です！
市長　（気さくに）そう改まるなよ、大統領じゃないんだから、（寝ている工場長を蹴っ飛ばす）
工場長　ってえな、誰だ？
市長　市長だよ。
工場長　（ハグして）会いたかったぁ、会いたかったよ市長、
市長　（ハグし返す）愛しの市長だよ。（笑う）だいぶ酔ってるな、
漁師　こちら、旅人さんだそうで、
市長　おお、ようこそクレナイの街へ、（手を出す）
旅人　お世話になります。（握手する）
工員　この市長さんが、今のクレナイの街を作ったんです。
旅人　なにをなさったんですか？

市長　え？　きいちゃうの？　それきいちゃうの？
工場長　長いぞー。
旅人　お願いします。
市長　いいだろう。むかーしむかし、ある青年がこの街で生まれ育った。青年はこの街が好きだった。しかし青年は一度外の世界を見てみたいと思い、中央の大学に行った。そこで青年は思い知った。中央が未来都市だとすれば、私の故郷は、いわば、んーとなんだっけ？
工場長　猿の森！
市長　そう、猿の森だ。野蛮人が住むジャングル。だがそれでも私は、やはりこの街を愛していた。このクレナイの街を変えることができるのは私だけだ。私はこの街の収入を３倍にする約束をし、市長に当選した。そして、約束は果たされた！
工場長　素晴らしい！
旅人　え、どうやってそんなことを？
市長　（旅人の隣に座り肩を組む）連邦議会が工場の建設地を探していたんだよ。私は、地道に根回しをして、ついには連邦議会に直訴して、その工場をこの街に誘致することに成功した。
工場長　おおっ！
市長　莫大な予算がつき、働き口もできた。ほかの街の人口もここに流れ込んできた。武器は作れば作るだけ売れる。つまり、私のおかげ、私のおかげで、この猿の森は未来都市へと生まれ変わったのだ！（みんな拍手）はあきもちい、この話すると気持ちいいなぁ。
工場長　一生ついていきます！
漁師　本当にありがとうござ、（急に立てなくなる）あれ、ああ、酔ってんな。（笑う）
工員　飲み過ぎですよ、（持っていたコップがすとんと下に落ちる）あれ？　（笑う）私も酔ってんな！

教師がトイレから戻ってきている。
弁護士の隣に座ろうとするが、市長を見つけてすぐに立ち上がっている。

教師　（市長に近づいている）あの、市長さん、よろしければ、（手を出す）
市長　あーどうもどうも、（握手する）
教師　ありがとうございます！　これからも頑張ってください！
市長　あぁ、ありがとう。うん、とても気分がいい、よし、市長みずから、旅人さんを案内しちゃうぞ。この街の素晴らしいところをあますことなく伝えちゃう。来なさい、宿も心配するな、私が泊めろといえば、誰も断らない。断ったら銃殺しちゃう！
工員　お供します！
旅人　ありがとうございます。
漁師　俺も！
工場長　ぜひ私も！

などと言いながら、市長、旅人、工場長、工員、漁師は去っていく。
教師は弁護士のいるところへ戻っていく。

弁護士　ようやく静かになった。
教師　もし私たちの子供が芸人になりたいなんて言ったらどうする？

弁護士　応援するよ。
教師　正気？　乞食の仕事よ。
弁護士　トイレ行く前笑ってただろ。
教師　笑われる仕事よ？
弁護士　（子供は）まだ立てないのか。
教師　まだ立てないのか？　まだ立てないのか？　なにその他人事。
弁護士　他人事じゃない。
教師　他人事でしょ、
弁護士　違う、
教師　えせ弁護士、
弁護士　弁護士だ、正真正銘の、
教師　私があの子のことでどれだけ心すり減らしてると思ってんの、
弁護士　忙しいんだ！
教師　私だって働いてる！
弁護士　俺の方が忙しい！
教師　くだらない仕事でね。
弁護士　どうくだらない？
教師　くだらないでしょ離婚調停なんて、
弁護士　儲かるんだ、
教師　人の不幸につけこむビジネスでしょ、不潔。
弁護士　もう一回言ってみろ。
教師　何度でも言ってやるわよ。このインキンクソゴミムシ、
弁護士　ひどくなってんじゃねえかよ、このゴマスリババア！
教師　何がゴマ風味ババロアよ。

弁護士　言ってねえよ、耳悪いな！
教師　しょうもない仕事しかしてないからしょうもないことしか言えないのね。私はこの街の未来のために子供たちを教育してる。
弁護士　学校の先生がそんな偉いかよ。
教師　人の離婚の話より前に、自分の家庭を見たらどう？
弁護士　……味が濃い。
教師　なに？
弁護士　お前の料理は味が濃い。
教師　あんた姑なの！
弁護士　本当に濃いんだ。
教師　じゃあ自分で作りなさいよ！
弁護士　怒るなよ。
教師　当然割り勘よ。
弁護士　「おごるな」じゃない、「怒るな」って言ったんだ！
教師　あんたのせいで怒ってるんでしょ！
弁護士　怒るなよ！
教師　まだ立てないのよ！
弁護士　……。
教師　ごめんなさい。お願いだからイライラさせないで。立てない。喋ることもできない、もう2歳なのに。
弁護士　……医者に診てもらった方がいいかな。
教師　……ごめんなさい、最近ダメね。
弁護士　いや、俺が悪い。
教師　せっかく結婚記念日なのに。わざわざママに（子供を）預かってもらったのに。
弁護士　（抱き寄せて）謝るよ。

教師　嫌い？
弁護士　まさか。

教師は弁護士に甘える。
そのまま二人は沈黙。

教師　ひゃ！
弁護士　ん？
教師　……。
弁護士　ネズミか。しっしっ。
教師　（動悸を落ち着かせようとして）最近多いわね。
弁護士　増え過ぎたら、大群になって崖から飛び降りるらしいよ。
教師　早く死んでくれればいいのに。
弁護士　行こうか。
教師　（動悸はまだ落ち着かない）ええ。

弁護士と教師、帰ろうとするが、
教師は何もないところでつまずく。

弁護士　おい、

教師は、倒れたまま立ち上がれない。

弁護士　おい、おい？
教師　あれ、ごめんなさい、
弁護士　立てるか？

教師、動けない。

弁護士　おい、おい、（教師を立たせる）すぐそこに知り合いの医者の家があるはずだ。行くぞ。

二人は去る。

3．市長の部屋

市長、議長、秘書が現れる。

秘書　申し上げます！　（紙を読む）「私どもは、賭博場を開きたいと考えております。この街の市民に、新しい」んー、ふらく、
議長　（紙をのぞき込んで）ごらく。
秘書　「娯楽を提供したいのです。なんとか現在の条例を改め、実現できるようにご協力をお願いいたします。」とのことです！
市長　確かに、新しい娯楽として悪くはないな。それで？
秘書　（続きを読む）「ところで、市長殿のご功績は大変素晴らしいものであり、つきましては、以下の額、」け、けんか？
議長　けんきん。
秘書　「献金させていただきたいと考えております。」（紙を渡す）

市長、紙に書かれた金額を見て、紙を破き、踏んづける。

市長　私はどんな市長だ？
秘書　はい！　すべての市民の味方、気さくで虫も殺さない市長です！
市長　その通り。
秘書　さらにいえば、公明正大！　威風堂々！　天真爛漫！　八方美人！　極悪非道！　有象無象！　目糞鼻糞！
市長　もういい。賭博場は悪だ。認められんね。
秘書　そう伝えます！　（去ろうとして）倍ですか？
市長　８倍だ！　そうすれば考えてやる。そう言っておけ。こんなはした金じゃ家も建たん。
秘書　はい！　そう伝えます！

秘書は去っていく。

議長　パパ、言われた通り市議会に条例を提出しておいたわ。次の議会で売春宿が開業できるように条例が改正される予定よ。
市長　おーそうか、よくやった。（議長の頭をなでる）お前はできる子だ。やつらは私の扱い方がわかってる。（窓の外を眺めて）次はどこに別荘を建てようかな？
議長　興味ないわ。
市長　見てみろ、この街を。９年前は想像もつかなかっただろ。美しく強い街だ。猿の森が、文明人の街になった、たった９年でだ。

医者が現れる。

医者　失礼します。

市長　おう、医者か。んーと、何か報告だっけ？
医者　いくつか気になる症例が報告されていまして。
市長　俺も最近気になることがあるんだ。下半身が不調なんだ。
医者　……急に体に力が入らなくなる例が、最近多く報告されています。
市長　そう、すぐ柔らかくなる。
医者　原因は特定できていません。
市長　診てくれないか？
医者　去勢しましょうか？
市長　（笑う）あと２０年は使いたい。原因がわかったら報告してくれ。まあ、一時的なもんだろ。働き過ぎか遊び過ぎだ。寝る間も惜しんで働いて遊んでる。夜が来ないのも考え物だね。

刑事が現れる。

刑事　失礼します。（医者をみて）おう。
市長　知り合いか？
刑事　ええ、まあ。

市長は、刑事に近くに来るように手ぶりして、

市長　いくらでやらせてもらえるのか聞いておいてくれ。
議長　パパ。
市長　ジョークだよ。
医者　失礼します。

医者は去る。

議長　いい加減やめたら、そういうの？

市長　（議長に近づいて）愛情表現だ。俺はこの街の市民全員を愛している。新しい香水か。

議長　なに？

市長　バラの匂いだ。

議長　（逃げるように）さあ。

市長　男か？

刑事　あの、ご用件は。

市長　ああ、そうだそうだ。あの、新聞社の記者がいただろう。あのー、なんてったっけ？　女の芸人を強姦したとかいう疑いのある、

刑事　ええ、さきほど逮捕状をとってきました。これから向かうところです。

市長　やってないんじゃないかなあ、彼。

刑事　……。

市長　彼はそんなことをする人間じゃないと思うな。それにさあ、その襲われたとか言っている女、頭弱いんだろ？　よくわからないで嘘を言ってるんじゃないかな。

刑事　そうでしょうか。

市長　彼がいてくれた方が、なにかとやりやすいんだよ。みんな新聞に書いてあれば全部信じるでしょ。当然、新聞に書いてあることは全て真実なんだけどさ。彼には、そういう「真実」を書く力があるじゃない。そんなに頭のいい彼が、そんな罪は犯さないんじゃないかなあ？　女を犯さないだけに。ね？

刑事　……なるほど、確かにその通りです。

市長　まあ、うまいことやっといて。

刑事　わかりました。失礼します。

刑事は去る。

議長　（小声で）汚らわしい。

市長　（ききとれない）なに？

議長　パパ、工場の件はどうするの？

市長　工場？

議長　機械から変な音が鳴ってるって。

市長　ああ、暇だし様子だけでも見に行くか。少し叩けば直るだろう。嵐がこようが隕石がぶつかろうが壊れないことになってるんだ。

市長と議長は去っていく。

4．夕方の港

工場長が、クッキーを食べている。

そこに、記者がやってくる。

記者　薬か？

工場長　おう。合法なドラッグだよ。どう？（薬を勧める）

記者　違法なものもやってる。

工場長　やってはいない。
記者　失礼。売ってる。
工場長　それで？
記者　今月はいろいろ出費が多かった。
工場長　新聞記者ってのは儲からんのかね？
記者　景気がよくなっても、他の奴らのようにバカみたいに給料があがらなくてね。
工場長　それでこうやって小遣いを稼ぐわけだ。
記者　無理は言わない。前と同じだけでいい。（金を渡せ、という手ぶり）
工場長　キミの娘、
記者　……。
工場長　そうドキッとするな、まだ何も言ってない。
記者　……。
工場長　うちの工場で働いてるな。それでこの前会ったときすぐ帰ったわけだ。工場の仕事は危険がつきものだからな、ちょっと手元が狂えば、指がふっ飛ぶことだってある。足が潰れることもあるなぁ。まあ、よくある話だ。
記者　……。
工場著　ジョークだよ。別に何も起こらない。キミが何も起こさなければね。俺を敵に回さない方がいい。小遣いは違うところで稼いでくれ。なんなら、紹介してやろうか？　小遣い稼ぎになりそうなことはいくらでも知ってる。（薬を吸引する）
記者　けっこう。

刑事が現れる。

刑事　どうも、記者さん。
記者　あなたは？
刑事　（紙を取り出す）キミに逮捕状が出ている。女芸人を強姦した疑いだ。だが、（紙を破って捨てる）残念ながら逮捕状を破損してしまった。これじゃあ逮捕できない。
工場長　（笑う）
刑事　キミは今まで通り仕事に精を出すように。（記者に小声で）市長に感謝したまえ。では失礼。
記者　（頭を下げる）
刑事　工場長。
工場長　（刑事に視線をやる）
刑事　裏稼業は儲かるか？
工場長　さあ。私は真面目に工場で働いているだけですよ。
刑事　私にはわかってる。
工場長　なぜ世の中に悪が存在するのか、（破られた逮捕状を拾い刑事に示す）それはあなただってわかっているでしょう？　ただ、世の中には２つの悪が存在する。裁かれる悪と、裁かれない悪だ。期待してるよ。（破られた逮捕状を渡す）
刑事　正義をなめるなよ。

刑事は去っていく。

工場長　ラッキーだね。無罪放免。狂った世界だ。だが悪くない。

ネックレスを持った漁師が現れる。

漁師　あ、工場長じゃないすか。サボってんすか？
工場長　休憩してんだよ。工場は空気が悪い。
漁師　工場はいいすね、儲かってて。
工場長　（去ろうとしている記者に）おう記者さん、
記者　……。
工場長　今度また一杯飲もうや。
記者　失礼。

記者は去る。

漁師　仲いんすね。
工場長　まあね。漁師は儲からんか？
漁師　魚の値段はそんなあがんないすよ。つーかきいてくださいよ。船とめてると、底の方に害虫がウジャアーって溜まるんすよ。みんなけっこう悩まされてたんすけど、でも最近いいポイント見つけたんすよ。
工場長　ふうん。
漁師　そこの、工場の近くに、たぶん、害虫をエサにしてる魚かなんかがいて、キレーにとれるんすよ。
工場長　へえ、面白いね。
漁師　海ってのはまだまだわかんないことばっかりすよ。俺、海って生きてると思うんすよね。怒ったり、喜んだり。喜んでるときは静かに俺たちに恵みをもたらしてくれて、怒った時は、荒波を立てて俺たちをさらっていこうとするんすよ。あの女芸人いたじゃないすか。この前酒場に来てた。あいつ、海と喋れるらしいんすよ。ま、ほんとかどうかわかんないすけど。
工場長　買ってきたんだな、それ（ネックレス）。
漁師　え？
工場長　告白するのか？
漁師　あ、まあ、似合うかわかんないすけど、
工場長　（胸を叩いて）ここがあれば大丈夫だよ。
漁師　そっすかねぇ。

工員がやってくる。
漁師は貝殻のネックレスを隠す。

工員　工場長、
工場長　ん？
工員　ちょっとまた機械が調子悪いみたいで、
工場長　最近多いな。
工員　見てみてもらってもいいですか。
工場長　おーっす。

二人で工場に戻ろうとするが、

工場長　ああ、お前は休憩入っていいぞ、
工員　え？
工場長　ま、この辺でキレイな空気でも吸ってけ、
工員　あ、ありがとうございます。
工場長　おう。（漁師に）頑張れ。
工員　？

工場長は去る。
漁師と工員、ふたり。

漁師　……あ、どうも。
工員　ああ、どうも。

沈黙。なんとなく気まずい。

工員　あー、……セミが鳴いてますね。
漁師　ああ、（なんとなく笑う）

沈黙。

漁師　え、セミですか？
工員　はい、え、鳴いてません？
漁師　どうだろう、俺少し耳悪いから。
工員　ああ、

沈黙。

漁師　クレナイの海は、いつでもきれいですね。
工員　ええ、
漁師　ほら、海に浮かぶ夕日っすよ。
工員　みかんみたい。
漁師　……たとえ独特っすね。

工員　え、そうですか？
漁師　でも……その、あなたの方が、きれいっすよ。
工員　え、ああ、
漁師　ああ、あの、これ、（ネックレスを出す）
工員　え？
漁師　あの、似合うかどうかわかんないすけど。
工員　……。
漁師　あの、つけてみてもらっていいすか？
工員　はい。

漁師、工員は首にネックレスをかける。

漁師　どうすか？
工員　逆に、どうですか？
漁師　もう、似合ってると思います。最高です。

工員、少し笑う。
漁師、急に工員を抱きしめる。
工員は少し驚く。
少し沈黙。

漁師　あの、すみません、不器用で、その、これが、今の俺の気持ちです。
工員　ああ……、はい、
漁師　嫌ですか？
工員　嫌じゃないです、

沈黙。

二人は少し離れて、手をつないで、夕日を見ている。

漁師　……やっぱキレイっすね、

工員　好き。

漁師　いや、あれ、太陽っすよ。

工員　好きって言ったんですけど。

漁師　え、ああ、月って聞こえて、ああ、あ、

工員　セミの音きこえない？

漁師　全然、

工員　耳悪いよ、（笑う）

二人は頭を寄せる。

工員　そろそろ戻らないと。

漁師　近くまで送ってくよ。

工員　ほーら、捕まえてごらん！

工員は去っていく。

漁師　あ、付き合うとそういう感じなんだな、

漁師は去る。

5．広場

時間帯としては夜だが、日が沈まないので明るい。

弁護士と刑事が現れる。

弁護士は酒を飲んでいる。

弁護士　くっそ、俺はこんなハイエナみたいな仕事するために弁護士になったんじゃねえんだよ。

刑事　立派な仕事だろ、離婚調停だって。

弁護士　あの意地きたねえ蛆虫どもが。俺は必死に必死に頑張って、車買えるくらいの金は勝ち取ったんだ！　それなのにあの女、「たったこれだけ」とか抜かしやがって！―

刑事　みんな浮かれ過ぎだ。金のあるやつを見つけたら、今の相手を捨てて、玉の輿に乗ろうとするんだろ。

弁護士　それで俺は、そんな金の亡者からおこぼれをもらう、最低のハイエナだ。

刑事　みんなそんなもんだ、今の時代は。

医者が現れる。

医者　うす。

弁護士　おう。

刑事　おう。

医者　いいの、こんなとこで酒飲んでて？

弁護士　いんだよ。

医者　奥さんは？

弁護士　すっかりよくなった。
医者　最近、奥さんみたいな症状の人、随分増えてきてるみたい。
弁護士　みんな脂っぽいもん食べ過ぎて不健康になってんだよ。
刑事　久しぶりだな、こうやって３人会うのも、
弁護士　ああ、
医者　みんな忙しくなったから。
刑事　お前らはいいよな、優秀でさ。
医者　あんただって立派な刑事じゃん。
刑事　一生下っ端だよ。お前らと違って大学行ってないし、難しい試験合格したわけでもないしさ。あの少年は元気にしてる？
医者　まあね。
弁護士　誰だよ？
刑事　こいつちょっと難しい病気にかかってる少年診てんだよ。
医者　守秘義務があるからぼかさなきゃいけないんだけど。でもだいぶいい方向にむかってる。あんたは最近どうなの？
弁護士　人の不幸に群がるハエイナ弁護士だよ。なにもかも失敗だ。弁護士も、結婚も。昔は良かった、モテた。モテモテだった。なんであいつを選んだんだ。お前らも知ってるだろ。俺はモテた。
医者　満足してないならやめたら、
弁護士　……金にはなるから、
医者　ちいさ。
弁護士　なんだよ。
医者　ダサすぎ、
弁護士　上から目線かよ、
刑事　まあまあ。時代が狂いすぎた。どうにもついてけない。

後輩芸人が現れる。発声練習を始める。
後輩芸人　（いろんな大きさや声色で）あー、あー、声！　声！　声！　声！……
後輩芸人は軽く体を動かしている。
刑事　（去ろうとしている医者に）帰んの？
医者　明日も早いから。
弁護士　またな。
医者　（去り際に）まともんなれよー。
医者は去る。
弁護士　一言多いんだよ。
後輩芸人　おーい、うみー！「なんだぁい？」今日は元気か？「しけてるよぉ」海はいいよなぁ「なんでだぁい？」だって怒ったら簡単に人を殺せるからさ、オイラが殺そうとしたら逆に殺されちゃうよ。
記者が現れている。
記者　海と話してるのか。
後輩芸人　怒ってんだ。
記者　バカバカしい芸だな。
後輩芸人　オイラ馬鹿だからな。

先輩芸人が現れる。調子が悪そうで、ろれつも少し回らない。

先輩芸人　近寄るな。
記者　なんだよ。
先輩芸人　らいじな後輩を襲った。
記者　合意の上だ。
先輩芸人　気づいたらやられてたと言ってる。なあ？
後輩芸人　うん。
記者　違うよな。
後輩芸人　うん。
先輩芸人　ろっちらよ？
後輩芸人　うん？
記者　あんたは誤解してるよ。
先輩芸人　いいから去れ。
記者　わかったわかった。（離れる）
後輩芸人　うんこ出たか？
先輩芸人　ああ、（座り込む）くそ、軟弱な体ら。
後輩芸人　うんこも軟弱だったか？
先輩芸人　下痢ら。
後輩芸人　今日は休めよ。強靭なうんこが出るまで休めよ。
先輩芸人　ラメら。この程度で休んれたら、芸人なんか死んら方がマシら。
後輩芸人　本当に死にそうだ。
先輩芸人　舞台で死ねれば本望ら。声をらせ！
後輩芸人　うい。さあさあ、寄ってらっしゃい見てらっしゃい、今日も楽しい芸が始まるぞ。今日見せまするは、オイラたちのオハコ、猫ダンス、さあ寄った寄った！

後輩芸人の発する音楽を背景に、
猫のような踊りを踊る先輩芸人。
踊りはだんだん激しくなり、最後はもだえ苦しむようになる。
いつものダンスと様子が違う。
先輩芸人は妙な苦しみ方をしている。

先輩芸人　ニャー！！

先輩芸人は、パタッと動かなくなる。
大衆はどよめく。

後輩芸人　はいっ！

大衆は拍手する。

後輩芸人　（先輩芸人が起き上がらないのでもう一度）はいっ！
先輩芸人　……。
後輩芸人　おい、終わりだよ。
先輩芸人　……。
後輩芸人　おいー、おいー、（先輩芸人をゆするが起き上がらない）本望だ！　本望だ！　舞台で死んだ！　本望だ！
刑事　（先輩芸人に）おい、おいあんた、しっかりしろ、おい、誰か医者を呼べ！

弁護士　あいつ呼んでくる！

弁護士は去っていく。

後輩芸人　海が怒ってる！　近づくと海の怒りが感染して死ぬ！

刑事　おいあんた、手伝え！　向こうに運ぶ。

記者　ああ、

後輩芸人　怒ってる！　海が怒ってる！

刑事　（立ち止まって後輩芸人の言葉を聞いていた記者に）おい、なにしてる。

記者　ああ、

刑事と記者は先輩芸人を運んでいく。

後輩芸人　芸人を殺すなんてあんまりだな。なあ海、オイラたちがなにかしたかな。え、罰？　罰か！　人間が調子に乗り過ぎた罰！　あちゃー、もう少し調子に乗らなきゃよかった！

後輩芸人は去っていく。

6．市長の部屋

市長、議長、秘書が現れる。

秘書　（報告書を見ながら）「ここ1週間での死者は8名。合わせて1

7名が死亡。生前に、食べ物が飲み込みにくい、うまくしゃべれない、ものが握れない、耳が遠い、などの症状がみられた。激しい痛みに」そ、そえ？

議長　たえかねて、

秘書　「痛みに耐え兼ねて暴れることもある。」とのことです！

市長　原因はわかったか？

秘書　「原因は未だ不明。」とのことです！

議長　なぜわからないの？

秘書　「遺体や患者の体からは、これといった特異な物質は発見されなかった」とのことです！

市長　何者か……例えば敵国が密かに微量の細菌兵器をまいているとか、

秘書　わかりません！

議長　考えたくはないけど、

市長　なんだ、

議長　伝染病よ。

市長　……伝染病だった場合、どうなる？

議長　場合によっては街が壊滅する、いえ、連邦ごと壊滅する可能性も、

市長　なぜ原因が特定できない、

議長　医学でわからないことだってあるわ。

秘書　あ、あの、し、し、失礼ながら！

市長　なんだ？

秘書　いえ、なんでもありません！

市長　言いかけたなら言え！

秘書　ばか！

市長　なに！
秘書　馬鹿げています！
市長　馬鹿げていても言え！
秘書　いち、一部の市民が噂するところでは、これは、う、海の怒りだと！
市長　海？
秘書　はい！　クレナイの海の怒りです！
市長　馬鹿も休み休み言え！
秘書　だから馬鹿げていると言ったんです！
市長　だから貴様は馬鹿なんだ！　能なしの秘書が！　じゃあなにか、海に向かって、どうどう、どうどう、静まってねぇ、とかやるのか！　そんなことするくらいなら海なんか殺してやる！
秘書　海は殺せません！
市長　殺す！
秘書　どうやって殺すんですか！
市長　俺が全部飲み干す！
秘書　不可能です！
市長　わかってんだよ馬鹿！　俺の街だぞ！　俺の街だ！　海ごときに好きにされてたまるか！
秘書　私は、海の怒りではないと思います！
市長　貴様がそう言ったんだ！
秘書　ですから、市民の噂です！　馬鹿げています！
市長　うるさい、馬鹿っていう方が馬鹿なんだ！
秘書　はい、馬鹿は私です！

市長、椅子に座って沈黙。

市長　……お前の勘は鋭いかもしれんな。
秘書　はい、ご光栄、つかまくつ、つかまる、つかまつ、
市長　お前じゃない。伝染病の話だ。
議長　……。
市長　先ほど連邦政府から通達がきた。連邦政府はこの奇病を「クレナイ病」と命名、そして、このクレナイの街を封鎖せよ、だと。
議長　……。
市長　ほかの街に広がらないように。
議長　でも伝染病じゃない可能性もある。
市長　可能性、可能性、可能性じゃダメだ！　伝染病ではないと断言できなければ！
議長　……。
秘書　……あ、あ、あの、わたしより、て、てい、提案があるのですが！　市長、市長はお疲れのように思いますので、本日より、しば、しばらく長期休暇をとって、旅行にでも行かれてみては！　私もお供しますので！
市長　……その間、誰がこの街を動かす？　明日からこの街は大混乱に陥る、その街を、誰が動かすんだ。
秘書　そ、それは、誰かが、なんとなーく、やってくれるかと、
市長　俺の街だ！　覚えておけ！　この、クレナイの街は、俺の街だ！　わかったか！
秘書　わかっています！
市長　何が旅行だ！　何がお供しますだ！　貴様が逃げたいだけだろうが！
秘書　はい、逃げたいです！

市長　能なしが！　貴様、能なしのくせにこういうときだけは頭が回るんだな！
秘書　ありがとうございます！
市長　海を殺す前に貴様を殺すぞ！
秘書　海は殺せません！

市長は疲れて座り込む。

議長　……パパ、
市長　……封鎖だ。
議長　……。
市長　クレナイの街を封鎖する。明日から、誰もこの街からは出られない。

第二幕

7．弁護士の家

弁護士が現れる。
落ち着かない様子で歩きまわり、酒を飲む。

弁護士　くそ！

弁護士、イライラして体を動かしながら大声を発する。
教師が現れる。

教師　静かにしてよ、やっと寝かしつけたの。
弁護士　お前はいいな、ずっと夏休みで。
教師　（イライラして）学校が封鎖になったのよ。

外から「やめろ放せ、死にたくない！」「おとなしくしろ」など大きな声が聞こえてくる。

弁護士　（窓の外を見ている）まだ、警官に殴られてる。
教師　勝手に脱走しようとするなんて、裏切者ね。
弁護士　……久しぶりに離婚調停じゃない仕事がきた。
教師　へえ。
弁護士　クレナイ病患者の遺族が損害賠償請求をしたいってさ。
教師　弁護士らしい仕事じゃない。
弁護士　弁護士らしい？　戯言に付き合わされるのが弁護士らし

い仕事か。誰を訴えようとしてるか教えてやろうか？　海だよ！　海！　海の怒りに殺されたから海に損害賠償を請求するとか抜かしやがった。

教師　……。

弁護士　ピンとこねえのか、わかったよ。バカでもわかるように全部説明してやる。まず第一に、海を訴えることなどできない、なぜなら海に人格はないからだ。そして第二に、訴えられたとして、海の怒りなんか証明できるわけがない。さいご第三に、なにかの間違いで証明できたとして、海に金を払う能力などない！　わかったか、この狂った裁判が！　法律家に対する侮辱だ！　あのやろう侮辱罪で訴えてやる！

教師　静かにして！

また外から叫び声が聞こえる。

弁護士　……いつまで封鎖する気だ。

教師　昨日、街から逃亡しようとした生徒の家族が、警備の奴らとぶつかって銃殺されたって……、私たち全員殺されるの……？

弁護士　無理やり出ようとしたからだ。すぐ原因が究明されて解決するはずだ。

教師　すぐっていつよ、

弁護士　すぐはすぐだ！

教師　静かにして、あの子が起きちゃう。

弁護士　起きたきゃ起きろ！　そっから立ち上がれ！

教師　……。

弁護士　……（子供は）まだ立てないのか。

教師　そうよ、

弁護士　喋ることも。

教師　そうよ、

弁護士　いつ俺のことをパパと呼ぶんだ！

教師　黙って！

奥から赤ん坊の泣くような声が聞こえる。

教師　もう！

教師、赤ん坊のもとへ行こうとするが、何もないところでつまずいて転ぶ。

教師　もう、

教師立とうとするが、立てない。

弁護士は、教師のクレナイ病の可能性を直感する。

教師　違うわよ。これだけ勤勉に生きてきた私が、病気になっていはずがない。でしょ？

教師はなんとか立ち上がる。

教師　ほらね。私みたいな人間は病気になんかならない。クレナイ病は、悪いやつや、つまらないやつだけがかかるの。あんたみたいなね！

教師は、去っていく。
弁護士は黙って酒を飲む。
ドアをノックする音が聞こえる。

弁護士　誰だ？
医者の声　私。
弁護士　どうぞ。

医者が入ってくる。

医者　元気？
弁護士　体はね。心はズタボロだ。飲むか？
医者　今日は仕事で来た。
弁護士　あいつは元気にしてるよ。
医者　彼女と子供を隔離することになった。
弁護士　……。
医者　クレナイ病の疑い。
弁護士　まさか。

医者、行こうとする、

弁護士　おい、根拠はなんだ。
医者　この前、料理の味が濃くなったって言ってたでしょ。
弁護士　だからなんだよ。
医者　料理の味が濃いのはクレナイ病患者の疑いがある。
弁護士　（つかみかかる）ふざけんな、じゃあ何か、嫁の料理を食った姑が、「なんて味が濃いの、私を殺す気？」って言ったら嫁は病気か！　違う、病気なのは姑だ！
医者　味覚の低下。
弁護士　……。
医者　味を感じなくなる。クレナイ病患者の典型的な症状。なにもないところでつまずく、立てなくなる、耳が遠い、全部クレナイ病患者の症状。それにうまく喋れないという症状もある。子供は喋れるようになった？
弁護士　……。（医者から離れて酒を飲む）
医者　そういうこと。納得した？
弁護士　違う。あいつは違う。子供も成長が遅いだけだ。
医者　病気かどうかは客観的な症状で決める。感情は関係ない。
弁護士　……いつからだ？
医者　なに？
弁護士　いつからそんな人間になった。お前はそんなやつじゃなかった。
医者　そういう仕事だから。
弁護士　心を悪魔に売る仕事か！
医者　……昔、ある患者さんに入れ込み過ぎた。冷静に見れば完治の見込みはなかった。それでも私は必ず直す気でいたし、彼女の家族にも必ず直しますと言ってしまった。そして当たり前に死んだ。家族からは、嘘つき、人殺しと罵倒された。
弁護士　そいつらがバカなだけだ。
医者　ううん、私は勘違いしていたし、家族を傷つけた。医者として間違っていた。それからこうなることにした。以上。この説明で満足？

弁護士　どうしても連れていくのか。
医者　……。
弁護士　家からは一歩も出さない。看病だって俺がする。
医者　今まで子供の世話だってしてこなかったのに？
弁護士　これからはする。
医者　……そう、じゃあどうぞ。
弁護士　いいのか？
医者　実際のところ、クレナイ病が感染症である可能性はとても低い。
弁護士　感染症じゃない？
医者　病原菌も、寄生虫も発見されていない。
弁護士　じゃあなんで街が封鎖された？
医者　断定はできないから。それに、連邦政府としても、他の街を安心させたいんでしょう。封鎖さえすれば、ひとまず他の国民は安心する。
弁護士　じゃあこの病気は？
医者　わからない。医者や科学者が調査中。くれぐれも、奥さんと子供がクレナイ病だってことは、近所の人には秘密にね。
弁護士　ああ。
医者　それと、生きるか死ぬかは半々くらいだと思って。生き残れたとしても、一生後遺症に苦しめられる可能性もある。
弁護士　……。（頭を抱える）
医者　医者として、先に言っといた方がいいと思ったから。
弁護士　わかった。
医者　お大事に。
弁護士　ああ。

医者は去る。
赤ん坊の泣き声がきこえる。
弁護士　まだぐずってんのか。俺があやすよ。
弁護士は去る。

8．夜の港

浮かれた格好の工場長が笛を吹いている。
そこに酒を飲んでいる記者が現れる。

記者　陽気だな。
工場長　めでたいからな。
記者　めでたい？
工場長　結婚したんだろ。キミの娘。
記者　ああ、
工場長　（笑う）よくこんなときに結婚できるもんだ。まあ、あの漁師は、見栄っ張りで短気だが、根はいいやつだ。
記者　……。
工場長　子供ができたんだってな。
記者　ああ。
工場長　もう少ししたらいったん工場の仕事は休むとさ。落ち着いたらまた復帰したいらしい。仕事が好きなんだろう。工員の多く

は病気が流行ってるのにきちんと仕事にくる。実に真面目だ。自分だけは病気にならないと信じているんだろう。娘が職場を休むからって、俺をゆすろうなんて思うなよ。お前が強姦魔だって知ったら娘さんどう思うかな。父親が犯罪者なんて、かわいそうに。

記者　逮捕されなかった。犯罪者じゃない。（飲む）心外だよ、犯罪者に犯罪者呼ばわりされるなんて。

工場長　俺も逮捕されてない。

記者　確かに。（笑う）

工場長　俺はあんたのことが気に入ってるみたいだ。金がほしいならいくらでも紹介できる。今は絶好のタイミングだ。警察は街の混乱を止めるので忙しい。まあ、逮捕されても責任はとれないが。

記者　……考えさせてくれ。

工場長　ああ。

記者　……なあ、神はいると思うか？

工場長　（笑う）らしくねえな。いても役に立たんことはわかる。

記者　だが信じてみるのもいいかもしれない。久々に地上に降りてきてるかもしれない。

お腹の少し膨らんだ工員と、酒を飲んでいる漁師が現れる。

記者　（工員が来たのをみて）じゃあな。

工場長　おう。

記者は去っていく。

工員　（記者を見て）あ、

工場長　こういう夜は、海を見ながら酒を飲みたくなるな。

漁師　あ、工場長、

工場長　気は使わなくていいよ。（工員に）少しお腹も大きくなってるんだし、あんまり外に出ない方がいいんじゃないか。

工員　いえいえ、これくらいならまだ。仕事も、行ける限り行きます。

工場長　まあありがたいけどね。どうぞ夫婦おふたりで。俺はこっちで飲んでるから。

漁師　ありがとうございます、

工場長は離れたところへ。

工員　いい風だね。

漁師　ああ。

工員　最近ようやく夜が来るようになった。

漁師　俺さ、生まれてこの方ずっと海を相手に仕事してきてるからさ、なんとなくわかるんだよ。海は生きてる。それに、確かに最近、荒れてると思う。だから、本当に海の怒りかもしれない。

工員　海は何に怒ってるの？

漁師　それはわからないけど。

議長がやってくる。

漁師　あ、どうも、議長。

議長　不要な外出は避けてもらいたいわね。死ぬわよ。

工員　海の怒りなんですか？

議長　なに？
工員　この病気は、海の怒りなんですか？
議長　さあ。（工員のお腹を見て）子供がいるの？
工員　そうなんです。
議長　いくつ？
漁師　（笑う）まだ０歳に決まってるじゃないですか。
議長　彼女。
漁師　あ、ああ、（笑う）そうか、
工員　２８です。
議長　あら、誕生日は？
工員　３月です。
議長　何日？
工員　３日です。
議長　偶然。
漁師　なんですか？
議長　私も同じ日よ。しかも２８歳。
漁師　え、すごいじゃねえかよ、議長さんと同じ日に生まれたなんて。
工員　光栄です。
議長　（工員をジロジロ見て）不思議なもんね。
工員　なんですか？
議長　同じ日に生まれたのに、こんなにも違うなんてね。私だったら考えられないもの、毎日油まみれになって、怒鳴られながら機械を相手にするなんて。
工員　バカにしてます？
議長　まさか、褒めてるのよ、すごいなって。

漁師　議長さんの方がすごいですよ。なんせ市長のお嬢さんなんですから。
議長　市長の娘だからすごいってわけ？　あのアブラムシの七光りがなけりゃただの女だって？
漁師　いや、そうじゃなくて、
議長　（工員に）確かに、生まれた場所が違えば、私達、違っていたかもね。でも、もし私があんただったとしても、そんなにぼんやりとした目つきで生きてなかったと思うわ。
漁師　はい、議長さんはほんとすごいです。
工員　（漁師を軽くたたく）
漁師　なんだよ。
工場長　（議長と目を合わせる）おう、
議長　あ、ちょっといい？（工場長に近寄り小声で）やっと大統領側と話が済んだわ。裏のルートで兵器は輸送するから、予定通り工場の生産スピードは落とさずにやって。
工場長　おっす。（匂いを嗅ぐ）うん、俺好みの匂いだ。
議長　ほんと？
工場長　まあな。（小声で）一時間後いつものホテルで。
議長　ええ。（漁師たちに）じゃ、不要な外出は避けるように。あ、（工員に）あなたもう少しまともな服着た方がいいわよ。
漁師　いい夜を、議長。

議長は去る。

工員　どっちの味方なの？
漁師　え？　なんか怒ってる？

工員　別に。

遠くから「放せ！」「おとなしくしろ！」などの声。

漁師　（不安そうにしている工員に）大丈夫、俺達には関係ないよ。

旅人が現れる。

旅人　どうも。

漁師　あ、どうも旅人さん、旅人さんも、夜、海が見たくなるんすか？

旅人　まあ。

漁師　それにしても、まだここにいたんですね。

旅人　（ややイラついたように）や、そりゃあ、

漁師　あ、あそうか、出られないですもんね、この街から。あ、いや、すみません、わざとじゃなくて。まあでも、大したことじゃありませんよ。もうすぐおさまりますよきっと。（工員に）な？

旅人、急に大声をあげながら、地面を転がりまわる。

旅人　せっかく故郷を飛び出して来たらこれだよぉ。病気で死んで、その辺の土に雑に捨てられて、この土地の養分になって終わりなんだぁ。

工員　まあ、まあ、落ち着いて、

旅人　触んな、うつったらどうすんだ！

沈黙。

旅人　あ、あ、すみません、取り乱しました。その、そういう意味じゃなくて、

漁師　いえいえ、大丈夫ですよ、な？

旅人　すみません。

工員　……。

漁師　（工員に）そろそろいくか。な？　あの、きっと病気なんてすぐおさまりますから。頑張ってください。ね？（工場長に）工場長、帰ります、

漁師と工員は去る。

工場長　お気持ちはわかりますよ。旅先でこんな目にあっちゃね。

旅人　いえ、すみませんでした。

工場長　正直、今すぐにでもこの街から出ていきたいでしょう。

旅人　まあ、それはその、

工場長　（金の手ぶり）これ、出せます？

旅人　え……、

工場長　街の境を警備してるやつに知り合いがいましてね。そいつが担当の日なら、話はつけられるんじゃないかな。ま、そんな無茶な額は吹っ掛けませんよ。

旅人　……。

工場長　（無邪気に笑う）

旅人　……？

工場長　いやいや失敬、あんまり思いつめた顔をしてるんでね。そ

りゃそうか。こんなやつがそんな話すりゃ、まあそうか。
旅人　いえ、
工場長　心配ご無用。全くの善意ですよ。巷じゃ、俺のことを悪党のように思っている連中がいますがね、誤解と言わざるを得ない。俺はただ、ちょっとズルをして生きているだけなんですよ。世間の奴は真面目すぎる。真面目、実に真面目ですよ。いや、真面目というのは実にいいことなんです。権力者にとってね。（笑う）真面目な連中は決めごとをきちんと守りますからね。ただね、そのルールってのは誰が作っているんです？　ルールを守る前に、本当にそのルールが正しいのかどうかを考えなくちゃいけないでしょう？　それが私が不真面目な理由ですよ。私は正しくないと思ったルールは積極的に破るんです。それが真面目な連中にとっちゃ面白くないんでしょうね。人間にとって重要なのは、ここ（頭）じゃない、ここ（心）ですよ。あなたの災難には同情しますよ。だから、あなたのためなら、私はルールを破ります。大した額は要求しない。持たない奴からとることはしませんよ。
旅人　……あなたは、なぜこの街を出ないんですか？
工場長　……。
旅人　この街を出るルートがあるなら、あなたが真っ先に出ていってるはずじゃないですか。
工場長　（笑う）旅人さん、私はこの街が好きなんですよ。結局のところね。それに、私は病気にならない。これは根拠ない自信ですがね。

刑事が現れる。

刑事　おい。
工場長　おお、どうも刑事さん。一杯やりますか？
刑事　なぜだ？
工場長　怒ってます？
刑事　裏で手を回しているな？
工場長　すみませんが、私は大学を出てないんでね。バカでもわかるように話していただけますかね？
刑事　裁判所からお前の逮捕状が出ない。
工場長　（笑う）そりゃ逮捕する根拠がないからでしょう。
刑事　他の容疑者ならとっくに出てるような段階だ！
工場長　何に怒っているのかさっぱりわかりません。
刑事　とぼけるな！
工場長　（笑う）あんたは真面目過ぎる。さぞ扱いやすい犬なんだろうな。市長の犬が。ほら、ちんちん、ちんちん。
刑事　（工場長の胸倉をつかむ）
工場長　（刑事の拳を指して）暴行ですよ。
刑事　（離す）
工場長　あなたは私と同じですよ。違うのは、私の方が不真面目で、かつ、あなたより賢いってことです。
刑事　……。
工場長　ほら、ハウス、ハウス。
刑事　必ず牢屋にぶちこむからな。

刑事は去る。

工場長　いやいや失礼。嫌いなんですよ。自分が色々我慢してるか

らって、自由にやってるやつを妬んで騒ぐ連中がね。みっともないでしょう。（飲む）

旅人　……。

工場著　いかがです、この街から脱出する件は？

旅人　少し考えさせてください。

工場長　ゆっくり考えるといいでしょう。私は焦っちゃいませんからね。試しに彼に会ってみましょうか。気さくでいいやつですよ。次の出勤日も確認できるかもしれない。どうぞ、ついて来てください。

旅人　はい。

二人は去っていく。

9．弁護士の家

弁護士　その日は珍しく仕事が早く終わった。離婚調停の多くが打ち切りになっていた。みんな、こんなときに離婚している場合じゃないと気づいたんだろう。妻の誕生日だった。店の半分は閉まっていたが、残りの半分は相変わらず営業を続けていた。妻が以前欲しいと言っていた指輪を買って帰った。家に帰ると、妙に静かだ。初めから誰もいなかったような、自分の家ではないような。外出禁止のはずだった。おい、おいいるか？……返事はない。何かが頭をよぎった。「いえで」の３文字だ。俺に嫌気がさして……いや、ただ眠っているだけだ、そう期待した。部屋の扉を開けると、妻がいた。ただひとつおかしなところは、妻の足が宙に浮いていることだった。

弁護士は、大声を上げる。

妻の首にかかる縄を外そうと近づくと、なにかを踏む。

弁護士　俺が踏んだもの。それは小さな人間だった。首には絞められた跡がはっきり残っていた。子供の手は冷たく、妻の足も冷たかった。

弁護士は、大声をあげて去っていく。

１０．広場

後輩芸人と記者が現れる。

ねずみがチューチュー鳴いている。

後輩芸人　わー、わ、わ、わ、ネズミがたくさんいる。ネコは大喜びだ。

記者　見なくなったな。

後輩芸人　海が怒って、ネズミにこの街を襲わせてるのかな、チューチュー、

記者　平気なのか？

後輩芸人　ネズミ好きだからな。食べないけど。

記者　相方死んじまったんだぞ。

後輩芸人　でも死なないと生まれられないよ。うん？　逆か？

記者　バカにはわかんねえか。
後輩芸人　（ねずみに向かって）ニャーニャー、猫、消えちゃったな。
記者　大切な人を失う苦しみは、お前にはないのか。
後輩芸人　あるといえばあるし、ないといえばないさ。
記者　……肺炎で死んだんだ。妻がね。
後輩芸人　ご愁傷様。
記者　数年前だけどな。今でも思い出すよ。死ぬ間際に、俺の方を見て、ごめんなさい、ごめんなさいって謝るんだ。なにがごめんなさいなんだ？　死ぬことを謝る必要があるのか？
後輩芸人　あるといえばあるし、ないといえばないさ。
記者　なあ、お前は見失わないのか？　なぜここでこんなことをしているのか？　大切な人を失って。
後輩芸人　バカはこれまでのことは忘れるし、これからのことは知らないんだ。だから、今のことしかわからない。って誰かが言ってた。誰か忘れたけど。
記者　馬鹿は幸せだ。
後輩芸人　オイラは海のことで頭がいっぱいだ。うーみーうーみー、
記者　おい、遠巻きにお前のことを見てるやつがたくさんいるぞ。最近お前のことを神様だと思ってるやつもいるみたいだ。それもかなりたくさんな。
後輩芸人　オイラは神だからな。海の話でもききたいのかな、
記者　不安なんだろう、
後輩芸人　なあみんな、海が怖いか？　オイラ怖いのは嫌なんだ。だって、怖いのって、とっても怖いからな。だからオイラは、みんなのこと、怖くなくしたいな。どうすればいいかな。海に謝ればいいのかな！　うみー！　ごめんなー！　うみー！　あ！

記者　おい、なんだよあれ……
後輩芸人　ああ、ああ、
記者　海が、赤くなっている。
後輩芸人　ああ、ああー！

後輩芸人は、もだえて、転がり、暴れまわる。

記者　どうした、おい！
後輩芸人　海が真っ赤になって怒ってる！　ネズミたちがオイラたちを殺す。クレナイの街の海が、紅に染まる。（ネズミに）近寄るな！　近寄るな！
記者　おい、本当に海が怒ってるっていうのか！
後輩芸人　オイラたちの汚れた体を血に染める気だ！　クレナイの街が血の紅に染まる！
記者　どうすればいい？
後輩芸人　汚れた体を清めるんだ！
記者　どうやって？
後輩芸人　消毒！
記者　酒か？
後輩芸人　クレナイの、クレナイの、
記者　クレナイの酒か！
後輩芸人　ああー！

後輩芸人は走り去っていく。

記者　クレナイの酒だ！　クレナイの酒を探せ！　俺たちだけで

も生き残るんだ！

記者は去っていく。

１１．夜の教会

医者と弁護士が現れる。

弁護士　悪いな、こんなところに連れてきて。
医者　神様を信じる気になったの？
弁護士　金が溢れるようになってから、この教会に来る人は減ったらしい。
医者　最近じゃまた増えてるみたいよ。
弁護士　困った時だけ神頼みだ。
医者　……残念だったね。
弁護士　俺が悪かった……守れなかった、あいつも子供も……、
医者　こういうとき、なんて声かければいい？
弁護士　いや、気にしなくていい。少年は元気にしてるか？
医者　ん？
弁護士　お前が入れ込んでる少年だよ。
医者　ああ、それがね、だいぶよくなった。このままいけば、完治する。少しリハビリが必要になるけど。
弁護士　嬉しそうだな。
医者　……そう？
弁護士　入れ込むと、もしものときへこむぞ。

医者　そうね。
弁護士　クレナイ病は？
医者　今のところは。でも安心はできない。急に発症する可能性もある。
弁護士　海が紅に染まった。
医者　本当に海の怒りなのかも。
弁護士　酒場が襲撃された。
医者　クレナイの酒があれば病気を免れるってデマが広がってるみたい。
弁護士　溺れてるやつは、藁だって掴もうとする。神様だって、そういうもんだ。何もせず救いを求めるのはやめた。この教会に来たのはゲン担ぎみたいなもんだ。これからの大仕事が成功するように。
医者　なに？
弁護士　裁判だ。
医者　海を訴えるってやつ？　勝っても金にならないでしょ。
弁護士　訴えるのは海じゃない。
医者　？
弁護士　海が紅に染まったのは、海の怒りなんかじゃない。工場の近くに船を泊めると、船底の害虫がきれいにいなくなるらしいんだ。つまり……、
医者　……。
弁護士　伝染病じゃない。
医者　まさか。
弁護士　事務所で学者に調査を依頼した。いずれ結果が出る。必ず出る。

医者　でも患者から異常な物質は出てきていない。
弁護士　もっとよく調べれば出るはずだ。……この裁判の原告は、クレナイの街の市民全員。訴えるのは海じゃない。クレナイの街、そして工場だ。あの工場を止める。

二人は去る。

12．市長の部屋

市長と、議長、秘書が現れる。
市長は服を着ながらやってくる。

市長　そう怒るなよ。
議長　本当に不潔。
市長　なにがいけない？
議長　どう考えてもおかしいでしょ！
市長　（秘書に）おかしくないよなあ？
秘書　はい、そう思います！
議長　おかしいでしょ！
秘書　はい、そう思います！
議長　もう二度とあの倉庫に入れない。
市長　だいたい勝手に開ける奴があるか、
議長　あんあん聞こえてんのよ！
市長　じゃあ余計開けちゃダメだろ！
議長　死んだママに申し訳ないと思わない？
市長　そう怒るな、顔が崩れるぞ。
議長　（顔をそらす）

弁護士が現れる。

弁護士　失礼します。
市長　ん、誰？　なんの用？
弁護士　通りがかりに倉庫を覗いてきました。
市長　……。
弁護士　ええ。随分と水を蓄えているんですね。
市長　あそれ？　非常用だよ。どこの街でもやってるだろう？　ってか誰？
弁護士　自分たちのための水じゃありませんか？
市長　だから非常用だよ。であんた誰？
弁護士　あなたたちは知ってるんだ。
市長　だから誰だよ！
弁護士　弁護士です。
市長　弁護士さん？　弁護士さんが何の用？
弁護士　クレナイ病は伝染病なんかじゃない。
市長　その話時間かかるかな？　売春宿予約してるんだけどなぁ。
議長　またなの？
市長　俺は元気なんだよ！
議長　いい加減にしてよ、
市長　この街ではもう合法になったの。
弁護士　聞いてください！
市長　なに？　あんた話長いの。簡潔に喋って。

弁護士　調査結果が出ました。（書類を机にたたきつける）
市長　……。
弁護士　工場の排水が海を汚染している。これのせいで海が紅に染まった。
市長　……で？
弁護士　クレナイ病の原因はこれです。
市長　……あーキミあれか。工場反対派か。困ったなぁ。そういう古臭いやつが一番困る。タチが悪い。工場に反対してるからって、こんな言いがかりつけちゃってさ、
弁護士　言いがかりじゃありません。
市長　（書類に目を通して）うんうん、キミに都合のいいような憶測が書かれているだけだ。百歩譲って工場が多少海を汚染しているとして、海ってめちゃくちゃ大きいからね。海で小便漏らしたって影響ないでしょ。それと同じ。その海の汚染が病気を引き起こしている明確な根拠も書いていない。つまり、キミの妄想。はいバイバイ。おととい来てね。
弁護士　じゃあ、なぜわざわざ水を蓄えているんです。
市長　なんとなくです。さようなら。

秘書は弁護士を帰らせようとするが、振り払って、

弁護士　市長、
市長　うん？
弁護士　既に被害者の方たちと交渉し始めています。原告は数千人規模になるかもしれません。もし損害を賠償しない気なら、あなたを市長の座から引きずり降ろします。
市長　……ご自由に。

秘書に連れられ弁護士は去る。
沈黙ののち、市長、出かけようとする。

議長　売春宿？
市長　……いや、会いたい奴ができた。あいつにはしばらく黙っておいてもらおう。

市長は去る。

13．漁師の家

工員と漁師が現れる。
工員のお腹はへこんでいる。体調が悪そうだ。
セミの音が聞こえる。

漁師　なあ、行かなくていいよ仕事なんか。
工員　うん。（と言いつつも行こうとする）
漁師　（引き止めて）いいんだよ行かなくて。
工員　……。
漁師　な？　休め。

工員は座り込む。自分のお腹を触り、

工員　いなくなちゃった……なんで……？
漁師　大丈夫だよ、またつくりゃあさ、
工員　病気なの……？
漁師　わかんねえよ、わかんねえけどさ、もう考えるのやめよう、
工員　うるさい……、
漁師　は？
工員　うるさい！
漁師　なんだよ、
工員　セミ！　セミがうるさい！
漁師　鳴いてねえよ、セミなんか鳴いてねえんだよ、

沈黙。

漁師　……どうする？
工員　なに？
漁師　昨日、弁護士の先生がしにきた話。
工員　……工場は悪くない。
漁師　……まいっちゃうね、魚とか工場のせいだとか言われちゃうと。渡された資料もさ、正直、なに書いてるかわかんねえしさ。

工員、無言で出ていこうとする。

漁師　おい、
工員　子供も奪われたのに、その私から仕事も奪う気？
漁師　お前、本当に倒れるぞ。

工員は去り、漁師も追っていく。

14．夕方の水路

立ち入り禁止区域の水路。
弁護士はあたりを警戒しながら現れる。

弁護士　ああ、やっぱりそうだ。酷すぎる。

少しして刑事が現れる。

刑事　おう。
弁護士　おお。久しぶりだな。
刑事　相変わらず忙しそうだね。
弁護士　……まあな。
刑事　例の海を訴えるってやつ？
弁護士　これは海の怒りなんかじゃない。
刑事　確信があるのか。
弁護士　見てみろよ。あそこから流れてるのが兵器工場の排水で間違いない。この辺の水はきれいなのに、向こうから明らかに赤く濁ってる。妻と子供は、この街に殺された。
刑事　知ってると思うけど、ここ立ち入り禁止だよ。
弁護士　……それは知らなかったな。出るよ。
刑事　（行こうとする弁護士の腕をつかむ）
弁護士　？

刑事　お前に逮捕状が出ている。
弁護士　……？
刑事　強姦の容疑だ。酒に酔って女芸人を強姦した。
弁護士　なんの話だ？
刑事　わかってるよね？
弁護士　市長の差し金か？
刑事　……優秀なんだ、お前たちは。私と違ってね。
弁護士　待て、俺にはやることがある。まだまだ被害者たちに会わなきゃいけない。証拠だってまだ集めなきゃいけない。
刑事　恨まないでほしい。私はただ、仕事を真面目にこなすだけだ。
弁護士　やめろ！　この街の未来のためだ！
刑事　そう、この街の未来のためだ。この街を愛さない人間はこうなる運命だ。

第三幕

15．クレナイの街へつづく道

クレナイの街へ向かう市長と旅人。

市長　待ってくれ。
旅人　（市長が遅れていることに気づかず）ああ、すみません。
市長　少し休憩だ。
旅人　もうすぐですよ、
市長　すぐってどのくらい？
旅人　だいたい10分から3時間くらいです。
市長　幅が広いよ、
旅人　あなたの歩くスピード次第です。ほら、あそこですよ、見えますか？
市長　ああ。
旅人　どのくらいかかります？
市長　10分は無理だなぁ。
旅人　でしょうね。
市長　それにしても、随分いろんな話を知ってるもんだ。
旅人　いろんな人から話をききました。
市長　よし、少し休ませてくれ。その間、話の続きを聞かせてくれ。
旅人　歩きながらでも話せますよ。
市長　だから疲れたのぉ！
旅人　日が暮れますよ。
市長　あとキミさあ、

旅人　？
市長　割と出番少ないね。
旅人　（去ろうとする）
市長　嘘だから、
旅人　次から出てくるんですよ！
市長　わかるよ、そうだよね、
旅人　いつしか暮れないはずだったクレナイの街には昼が来なくなりました。一日中夜になったんです。まるで病気が昼を奪っていったかのように。病気を解決できる希望が、塀の中に入れられて光が奪われたのかもしれません。街の人も、こんなことは初めてだと言っていました。クレナイの街はアケナイの街になりました。そのせいか自殺者も増えました。街に死体が転がっていることもありました。私は街に閉じ込められている間、いろんな人に話をきいてまわっていました。なぜ自分がこんな運命をたどったのか、わかると思ったのかもしれません。弁護士の先生や医者の先生にもよく話をきいていました。弁護士の先生が逮捕された後、私は、医者の先生と出くわし、夜の教会へ行きました。

１６．夜の教会

旅人と医者が現れる。

旅人　この街にきてから一度も来ませんでした。不思議なもんです。
医者　今や人気スポットですよ。
旅人　神なんていやしませんよ。
医者　そう思います？
旅人　いたらこんな状況になってません。
医者　（笑う）同じ意見です。
旅人　それに、嫌なんですよ。こういうときだけ教会に行って無防備に神に祈る大衆が。
医者　セミ……？
旅人　え？
医者　え？……ああ、なんでもないです。
旅人　私は先生が羨ましい。だって先生は神になりうるでしょう。人を救うことができる。
医者　あなただって人を救えますよ。
旅人　そういう慰めは要りません。
医者　事実ですよ。
旅人　……これは誰にも言わないでほしいんですが、
医者　ええ。
旅人　近々ここを脱出する予定なんです。
医者　街は封鎖されてますよ？
旅人　まあ、あるツテをたどりまして。
医者　……まあ、そういう商売もあるんでしょうね。
旅人　私を軽蔑しますか？
医者　この街にいたくないと思うのは、自然なことでしょう。
旅人　私はあなたと話すのが嫌になってきました。あなたはなにもかも優れている。人間的にも。
医者　（笑う）気が合いますね。私も私みたいな人間は嫌ですよ。でも忙しかったらそんなこと考えずに済みます。
旅人　あの、今の私に手伝えることはありませんか？

医者　（意外そうに見る）
旅人　専門的なことはもちろんできませんが、雑用でも。それとも、こんなよそ者にできることなんか何もありませんか。せめてこの街を脱出するまでになにか、
医者　残念ながら、山ほどありますよ。医者も看護師も不足してますからね、手伝ってもらえるのなら大歓迎です。
旅人　ありがたいです。
医者　それと、……署名を集めるのは得意ですか。
旅人　？
医者　ここに連れてきてくれた友人が今塀の中にいるんです。この病気を終わらせるには彼の力が必要です。大丈夫ですよ、あなたはいろんな人と仲がいい。
旅人　やってみます。
医者　ひとつ言っておくと、あなたが病気になる可能性は低いです。この街にきて間もないですから。ただ、前も言いましたが、この街の魚や貝は食べないでください。病気の主な原因はそれです。あなたはクレナイ病にはかかりません。
旅人　安心しました。
医者　ついて来てください。仕事のこと、山ほど教えますよ。
旅人　ええ。

二人は去る。

17．取調室

刑事は弁護士を連れてきて、椅子に座らせる。
刑事　2カ月前の夜、酒場で酔っぱらい、女芸人を暴行、強姦した。間違いないな？
弁護士　……。
刑事　女芸人を強姦した。
弁護士　……。
刑事　女芸人を強姦した！
弁護士　……。
刑事　困るなぁ、そう何日も黙りっぱなしじゃ。
弁護士　俺じゃない……。
刑事　大丈夫だよ。認めてくれさえすれば、執行猶予つけるよ。
弁護士　お前にそんな権限はない。
刑事　検察に口きいとくよ。でも認めなかったら、懲役5年は固いぞ。そしたらクレナイ病患者の弁護どころじゃない。
弁護士　認めても同じだ。誰も俺に弁護を頼まなくなる。
刑事　でも自由の身だ。工場から手を引けばお前が犯罪者だってことは漏れないようにするよ。きっと新聞記者だって書かない。お前は賢いだろう？
弁護士　こうしているうちに人が死んでる。
刑事　残念なことだ。
弁護士　……お前の敵は誰だ？
刑事　警察の敵は犯罪者だ。
弁護士　じゃあ俺は敵じゃない。
刑事　犯罪者だ。
弁護士　俺を捕まえたら出世するのか？

刑事　上の人間が決めることだ。
弁護士　凡庸すぎる。使い捨ての駒だな。
刑事　調子に乗るなよ。
弁護士　思考停止の人形だ！
刑事　（殴る）
弁護士　あの市長がいなくなったら、出世はおろか左遷だ。
刑事　正義をなめるなよ、
弁護士　なあ、また昔みたいに喋ろうじゃないか。
刑事　……。
弁護士　お前は曲がったことが嫌いだったはずだ。
刑事　……。
弁護士　出世とか、金より、正しいことが好きだったはずじゃないか。
刑事　正しさじゃ生活できない。
弁護士　だから、正しさで生活できる世界にするんだろ。
刑事　……。
弁護士　勉強ができないとか、出世できないとか、それがなんだ。正しけりゃいいだろ！　昔のお前は正しかっただろ！
刑事　あいにく、釈放を決めるのは上の人間だ。
弁護士　人間に戻るなら今だぞ。
刑事　……お前の釈放を求める署名が集まっているらしい。すごい数だ。お前は人を救える。羨ましい限りだ。
弁護士　お前だって救える。
刑事　自分のことは自分が一番よくわかってる。
弁護士　案外、他人の方がわかるもんだ。
刑事　……休憩だ。外の空気でも吸おう。

弁護士　いいのか。
刑事　きっと明日にでも釈放される。拘束する根拠がない。あんなに署名が集まってちゃ、これ以上は無理だ。
弁護士　（手を差し出す）
刑事　敵とは握手できない。
弁護士　（無理やり握手し）この街を変えるよ。お前と一緒に。

二人は去る。

18．夜の港

相変わらずの浮かれた格好の工場長が酒を飲みながら現れる。

工場長　美しい海だ。まるで俺たちの心のように、赤くにごってる。悪くない。悪くない汚さだ。

記者が現れる。

工場長　おう。
記者　おう。
工場長　儲かってるか？
記者　まあ、おかげさまでね。
工場長　案外簡単だろ、儲けるなんて。
記者　クレナイ病だが、
工場長　ああ、

記者　あれの原因は、
工場長　俺はただ、議長の指示に従って工場を動かしてるだけだ。あんたんとこの新聞記事もたいがいだな。「工場の排水が原因であることは完全なデマである」ってね。市長の指示か？
記者　俺たちはジャーナリストとして仕事をしてるだけだ。真実とは言いきれないことを、「真実とは言い切れない」と書いただけだ。

少し遠くで、何発か銃声。
「やめろ！」という声と、また何発か銃声。

工場長　毎日人が死んでる。昨日は２９人だそうだ。そのうち１０人が自殺。５人が警官隊との銃撃戦で死んだ。いいよ。実にいい街だ。海も人も汚れている。俺よりもタチの悪い悪党ばかりだ。
記者　しかしお前も迂闊だな。俺に仕事を紹介するなんて。おかげで俺はお前の悪事の決定的な証拠をつかんでる。
工場長　……。
記者　いやいや、これは脅しじゃないんだ。でもなんかあったときは、俺も、お前も、地獄行きだ。
工場長　心外だなあ。せっかく仕事を紹介してやったのに。キミみたいなやつのことを何て言うか知ってるか？　「外道」だよ。
記者　ずるいやつが生き残るんだろう？　世の中は。
工場長　（記者の顔を見てニヤニヤする）
記者　なんだ。
工場長　いや？（笑うのをこらえる）
記者　なにがおかしい？
工場長　俺は突然、お前の絶望した顔が見たくなった。

記者　お前も一緒に地獄に行くことになるぞ。
工場長　そうイキるな。ちょっとした昔話をするだけだよ。
記者　ほう？
工場長　ほんの小さな悪事さ。あのときは俺も若かった。なんせ２８年も前の話だ。だが、（笑いをこらえる）まだとっといた方が面白いかな？
記者　言え、気持ちが悪い。
工場長　面白かったらぜひ記事にしてくれよ。まあ、作り話としてきいてくれ。昔、こんな仕事をしたことがある。貧乏な女だったな。彼女の親は貧乏で、その親もまた貧乏だった。彼女は妊娠していたが、きっとその子もまた貧乏になるだろう。今でこそみんな小金持ちになったが、当時は貧しい街だった。その女は、自分の子供にみじめな思いをさせたくなかった。そこで女はなにを考えたと思う？
記者　さあな。
工場長　答えてみろよ新聞記者なら。
記者　一生懸命勉強させていい仕事に就かせる？
工場長　違う。
記者　体を売って金を稼ぐ？
工場長　違う。平凡だ。記者の発想とは思えんな。
記者　早く言え。
工場長　実にシンプルで大胆な方法だ。その日俺は病院に侵入した。その日に赤ん坊を生みそうな母親の中で、金持ちそうな女を何人か見つけた。まあ身なりや持ち物、振る舞いでそれなりに見当はつくもんだ。あとはわかるだろう？　金持ちそうな家庭に生まれた赤ん坊と、依頼者の赤ん坊をすり替えた。どうだ？　面白い話

だろう？
記者　拍子抜けだな。思っていたより大した話じゃない。
工場長　だから小さな悪事だって言っただろう。
記者　結局バレたのか？
工場長　いいや、今の今まで誰も気づいていない。その赤ん坊たちは見事なまでに違う人生を歩んでいったよ。一人は市長の娘、そして市議会の議長として工場を指導し、もう一人はその工場でせっせと働いている。二人の誕生日は確か３月３日。今年で２８歳になったはずだ。
記者　……。
工場長　依頼者の女は、病気で死んだ。死に際に、何も知らない旦那と娘に向かって、ごめんなさい、ごめんなさいって謝ったそうだよ。（笑う）

記者、工場長の胸倉をつかむ。

工場長　作り話だよ。それに、もし本当だったとしても、俺を責めるのはお門違いだ。恨むならてめえの女を恨むんだな。もう死んじまったから恨めねえか。（笑う）肺炎で死んだんだってな。天罰だ。旦那の顔はつい最近まで知らなかったよ。それが、のこのこやってきて、俺に金をたかろうとするんだよ。お前の素性を調べ上げたらすぐにわかった。傑作だな。お前が娘だと思っていたやつは、ただの赤の他人だ。（笑う）

旅人が現れる。

工場長　おーどうもどうも。

記者はよろめきながら去っていく。

旅人　大丈夫ですか、あの人。
工場長　なーに、ちょっと調子が悪くなっただけですよ。それより喜んでください。２週間後に、ここを脱出できるタイミングが来ることがわかりましたよ。やつが監視役の担当の日で、しかも上司は誰も出勤していない。
旅人　……そうですか。
工場長　まだ迷っているんですか？
旅人　……。
工場長　まあ、好きにしてくださいな。これを逃したら、次、いつタイミングが来るかわかりませんがね。お返事待ってますよ。

工場長は去る。

秘書が、こそこそと現れる。

秘書　あ、あの、
旅人　あ、はい、
秘書　その、ぬす、盗み聞きする気は、な、なかったんですが、
旅人　……。
秘書　この、この街を、だ、脱出すると、

旅人、出ていこうとする。

秘書　ま、待ってください。
旅人　……。
秘書　わ、わたしは、まったく、せ、責める気はありません。
旅人　私は、もともとこの街の人間じゃない。
秘書　そう、そうです。
旅人　これくらいの権利はあるはずです。
秘書　ですから、それは、止めません。
旅人　そうですか。
秘書　小説を書いてるんでしょう？
旅人　え？
秘書　いえ、そういう噂を聞きまして。
旅人　いけませんか。
秘書　いえ、むしろ、応援します。私、好きなんです。ですから、ぜひ、傑作を。
旅人　……そうですか。
秘書　もし、よければ、読ませていただけませんか？
旅人　え？
秘書　書きかけの原稿でも。
旅人　ああ。
秘書　私の家に来ますか？　ご馳走しますよ。金だけはありますから。
旅人　……まあ、じゃあ、
秘書　市長がコテンパンにされるシーンとかありますかね。私、そういうのが読みたいんです。

二人は去っていく。

１９．市長の部屋

議長と秘書が入ってくる。
議長はヴェールのついた黒い帽子をかぶっている。

議長　まだパパは来てないみたいね。
秘書　そのようです、
議長　本当に気持ち悪いアブラムシ。そう思わない？
秘書　はい、その、気持ち悪いです！
議長　消えればいいのにね。
秘書　はい！

沈黙。

議長　もし私が市長になったら、もっとうまくやれる。
秘書　あの、て、手が震えていませんか？
議長　（自分の手を押さえて）まさか。
秘書　……く、クレナイ病では、
議長　私は病気にならない！　なんのために、わざわざ山の水を集めてると思ってんの？
秘書　し、失礼しました！
議長　……来ないわね。普段ならもう来てる時間よ。
秘書　あの、なぜ黒い帽子を？
議長　喪に服すのよ。

秘書　あ、どなたか、
議長　きっともう死んでる。
秘書　は？
議長　悪い事故にでも巻き込まれたのかしら。
秘書　ま、まさか。
議長　車にでもひかれた？

議長、秘書を見て、ニヤニヤ笑っている。

秘書　何をしたんです。
議長　なにも？

市長が現れる。やや足が悪そうだ。

市長　ちくしょうが。
秘書　お疲れさまです！
市長　車にひかれかけた。
議長　（舌打ち）生きてたのね。
市長　（聞き取れない）なに？
議長　不注意な車ね。
市長　いいや、俺にはわかる。あれはわざとだ。俺を殺そうとした。
議長　なんのために？
市長　知るか！　なんだその帽子は？
議長　なんでも。今日は必要なくなったわ。
秘書　あの、足、悪いんですか？
市長　ん？　違う、少し痺れるだけだ、なんでもない！

弁護士が現れる。

弁護士　失礼します。
市長　……。
弁護士　釈放されました。
市長　勝手に入ってこないでもらえる？
弁護士　クレナイ病患者全員に謝罪して、損害賠償してください。
市長　専門用語はよくわからんな。
弁護士　私の拘束中も、仲間が証拠を集めてくれた。
市長　どうせまたキミのくだらん妄想だろ？
弁護士　病気になった市民を見捨てるんですか？
市長　なぜやつらが病気になるかわかるか？　軟弱だからだよ。俺は医者の世話になったことなんかない、ただの一度もな！　自分が軟弱なせいでかかった病気を人のせいにしやがって！　てめえの弱さはてめえでなんとかするのが常識だ！
弁護士　死にそうな病人を見捨てるんですか。
市長　死にそうなら、そのまま死ね！

沈黙。

弁護士　なぜ認めないんです。
市長　認める必要がないからだ。
弁護士　あなたは間違ってる。
市長　間違ってない、似たような工場がある他の街で、こんな病気が流行ってるのは聞いたことがない。

弁護士　あなたは間違ってる！
市長　俺が間違っていたことなど一度もない！
弁護士　……。
市長　……なるほど、百歩譲って俺が間違っていたとしよう。しかしその間違っている男を市長に選んだのは誰だ？　お前らだ！　お前らが俺を選んだ！　だったら、間違ったのはお前らだ！

市長、急に立てなくなる。

市長　違う、これは違うぞ！　俺は一度だって病気になったことはないんだ！
弁護士　認めなければ訴えます。
市長　訴える？　お前たちが選んだ、この俺を訴える？　好きにしろ、２０年でも３０年でも争う。そして、必ず俺の正しさが証明される！
弁護士　……あなたには、一生人の痛みがわからない。次に会うのは法廷です。必ず工場を止めて、あなたを市長のイスから引きずり降ろします。失礼。

弁護士は去る。

市長　おい、なにをやってるんだ、立たせろ！
秘書　はい！（市長を立たせる）
市長　なめやがって。おい、あの記者を呼べ！　クレナイ病患者は、病気のフリをして金をむしり取ろうとする悪党だと書かせろ！　それと、あの刑事に、もう一度あの弁護士を逮捕させろ！

秘書　それは得策ではありません、
市長　得策もクソもあるか！
秘書　お、お言葉ですが、もうすぐです！
市長　なにが？
秘書　市長選です！
市長　……。
秘書　い、今ことをあ、あ、荒立てれば、市民たちは離れます！
市長　知るか！　俺以外に市長候補などいない！　この街には自分では物事を考えられない能なししかいない！　お前みたいなな！
秘書　そそそんなに、馬鹿にすべきではありません。
市長　馬鹿に馬鹿だと言ってるだけだ馬鹿！　やつらは自分たちの間違いを俺になすりつけようとする悪党だ！
秘書　あなたも間違えていた！
市長　……何が言いたい？
秘書　あなたは病気だ。
市長　これは病気じゃない！
秘書　自分の間違いを認められないびょびょ病気だ！
市長　……。
秘書　わわ私たちは間違えた！　間違えたんだ！　それを、みみ認めるんだ！　私も、あんた（市長）も、あんた（議長）も、クレナイの街の市民も、みんな、みんな、間違えていたんだ！　それ、それを、それを、み、認めなければいけない！
市長　……俺は間違えない。一度も間違ったことはない。
秘書　も、もう、ここの仕事は、でできません。
市長　……。

秘書　おおお世話に、ななりました。
市長　……。

秘書は去っていく。

市民　……。
議長　（私たち）病気よ。

２０．漁師の家

足が悪い工員と、足も悪く背中も痛そうに歩いている漁師。
漁師はろれつがまわらない。

漁師　つつつ……、
工員　やっぱり休んだ方がいいよ。
漁師　っへえ、誰がかへぐんだよ。
工員　私が稼ぐよ。
漁師　なめんな、お前なんかにヤヒナわれてたまるか、いたたたた！

漁師、痛みに耐えかねて、うずくまる。

工員　ほら、（背中をさする）

漁師は痛みにもだえて、大きな声を出している。

工員は、相変わらず漁師の背中をさする。
少しして、漁師はやや落ち着く。

漁師　誰もハカナなんか買ってくれねえ。くほ、くほが！　ハカナは悪くないんだ。

ノックの音。

工員　はい、どうぞ。

弁護士がやってくる。

弁護士　失礼します。
工員　ああ、どうも……。
弁護士　大丈夫ですか？
工員　ええ、よくあることですから。
漁師　ほの声は、弁護ひはんでふか？
弁護士　ええ。
漁師　ふみまへんね、はいきん目がかふんで。
弁護士　この前のお話、考えていただけましたか？
工員　まあ、その、
弁護士　私達と一緒に、この街と戦いましょう。
工員　……。
弁護士　もう確実なんです。工場の排水が海を汚染している。私たちは汚染された魚を食べて脳を破壊されているんです。なるべく多くの人数で訴えたいんです。お二人の力を貸してください。

工員　でも、患者の体を調べても、なにも出てこなかったんですよね。
弁護士　工場の有害物質は、脳にダメージを与えますが、その多くは体から排泄されて出て行っていたんです。よくよく調べて、ようやく脳に少し蓄積されているのが見つかりました。
漁師　このマヒのハカナはうまいんだ。俺がほひょうふる。誰一人ハカナをかわないとひても、俺らけは食いふふける。かららがろうなろうがな、頭がおかひくなろうが、俺はハカナを食うお！
弁護士　その魚を汚染したのがあの工場です。
工員　……。
弁護士　違うんです。あなたを責めたわけじゃない。とにかく、またみんなが魚を食べてくれるように、ぜひ、力を貸してください。
漁師　……。
工員　言わなければいけないことがあるんです。
弁護士　なんです？
漁師　和解案に応いまひた。
弁護士　？
漁師　マヒがラひてきた和解案に応いまひた。
弁護士　聞いてませんよ。なんですそれは。
工員　（紙を取り出して弁護士に渡す）見舞金をもらったんです。受け取る代わりに、もし原因が工場であっても、これ以上の金額は請求しないと。
弁護士　なに勝手なことしてるんだ！　よく見てみろ、こんな、こんなはした金で！　死ぬかもしれないんだぞ、これが、これがあんたたちの命の値段か！　まともに訴えればこれの１０倍以上はとれるんだ！

漁師　ほんなことやってたら、金もらえる前にひにまふよ。
弁護士　……なにもわかっていない、
工員　もう考えたくないんです。……もし弁護士さんの話が本当だとしたら、私たちはどうなります？　私は海をせっせと汚して、この人は、その毒をみんなに食わせてたんですよ。最近言われるんですよ、人殺し、人殺し、ってね。
弁護士　あなたたちは知らなかった！
工員　知らなきゃ人殺していいんですか。弁護士さんだって、奥さんと子供が死んだんでしょう？　大事な親や、子供や、恋人を殺されて、誰が許せるんです？　新聞で見たでしょう。この前、工場にたくさんの人が押しかけました。お前らのせいで父ちゃんが死んだ、お前のせいで子供が死んだ、って叫ぶんですよ。その人殺しが、どのツラさげて被害者ぶればいいんです？
弁護士　あなたたちは被害者だ。
漁師　ほもほもあなたの言うことはレンブマヒガってる。ほもほもハカナは悪くないんら。今やられもハカナを買わないひ、マヒにれりゃイヒを投げられる。だが、エンブ、エンブ誤解ら。このマヒのハカナはハイコウなんら。ハカナは健康にいいんら。ハカナ食って病気になるなんてあるわけないんら。弁護ひはん、たらのカフアワへらっらら、ほかあたってくらはい。俺たひは、あなたのウホはひんひない。
弁護士　……わかりました。ここにはもう二度と来ません。

弁護士は去る。
漁師は泣く。
セミの音が聞こえてくる。

漁師　俺は人殺ひやない、俺は人殺ひやない、俺は人殺ひやない…
…、
工員　うるさい、
漁師　は？
工員　うるさい！
漁師　なんらよほの言い方、
工員　セミがうるさいの！
漁師　らから、鳴いてねえんらよヘミなんか、
工員　鳴いてるでしょ！　耳聞こえないの？
漁師　聞こえてるよ！
工員　じゃあなんでこんな大きな音がきこえないの？　病気だよ！
漁師　病気はお前らよ！　お前の耳にひかきこえないんらよ！
工員　誰のせいでこんな病気になったと思ってんの！　あんたが、あんたが魚なんか食わせるから！
漁師　お前らが海を汚ひらへいらろ！　人殺ひ！　人殺ひ！
工員　あー！　あ、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、
漁師　謝んな！
工員　（セミがうるさすぎて苦しい）もうダメ、一緒にいられない、離婚だ、離婚、離婚、離婚！
漁師　らけんな！　（体が痛くなる）いた、いたたた、いって、あ、あ、

漁師は大きな声を出しながら、痛みにもだえる。
それはまるで、先輩芸人が披露していた猫の踊りのようだ。

やがて漁師は、痙攣し、動きが止まる。
セミはずっとうるさい。
工員は、大きな声をあげている。

※無料版はここまでです。ご覧くださりありがとうございました。全編はクラアク芸術堂の販売ページ（左のＵＲＬ）から購入できます。ありがとうございました。
http://www.clark-artcompany.com/public

あとがき

この作品はクラアク芸術堂の３回目の本公演のために書かれた。僕は３年でひとまとめというイメージを持っているので、この脚本はこの３年の集大成にする気持ちで書いた。来年からはまた違った趣向の作品をつくることになると思う。

今回は、社会について書くこと、その社会に住む人々について書くこと、サスペンスとして観客（読者）の気を引き続けることが課題だった。書き入れたい要素がたくさんあったため、脚本は５００００字程度になったが、削りに削って４２０００字程度におさめた。毎年毎年、「去年よりいいものを」と意気込んでいるせいか、それともいつも書いている脚本よりも分量や登場人物が多いせいか、毎年一筋縄ではいかない苦労がある。「カーテンコールの拍手で、この苦労が報われるといいな」と毎回思っている。

僕は、自分が無力だと感じることがあるし、無気力になることがある。できるだけ戦いたくない人間だし、面倒なことは避けたいと思っている。そういう考えの人は恐らく僕だけじゃないだろう。それは楽なことだ。自分が戦わなくとも、誰かがなんとかしてくれる……そう無意識に思っているのかもしれない。しかし、戦わなければいけないときが来るかもしれない。いや、もう来ているのかもしれない。そんなとき、僕たちは、戦えるのだろうか？　戦うようなときじゃない……と自分に言い聞かせるのだろうか？　戦うことで何かを救うことができるんじゃないだろうか？　そんなのは所詮フィクションの中の話に過ぎないのだろうか？　そんなことを考えつつも、やはり戦うのは避けたい、と思って、無力感にさいなまれているのかもしれない。そういえば去年書いた脚本のあとがきを見直したら、偶然にも「たたかう」ということについて書いていた。去年から考えていることがあまり変わっていないのかもしれない。

もうひとつ触れておくと、僕は、劇中で工場長が言うような「真面目」な人間だと思っている。当然工場長を肯定するわけではないけれど、今あるルールは、本当に正しいのだろうか？　という疑いは常に持っておかなければいけないのだろうと思う。これも去年のあとがきに書いていた。変わってないな。それは僕が変わっていないだけなのかもしれないし、僕の住んでいる社会が変わっていないのかもしれない。

この物語は、観た人になにを思わせるのだろうか？　「あー面白かった」で終わるのだろうか？　それとも、観終わった後に何かが残る物語なのだろうか？　何か、私たちが住んでいる世界を見つめ直すような何かが残ることを願っている。そう書こうと思ったら、やはり去年書いていた。何も変わってない。

２０１９年５月２４日　小佐部明広

《上演記録》

クラアク芸術堂第３回公演『クレナイの街』

【キャスト】

市長　――――――――　信山Ｅ紘希
議長　――――――――　佳猫まいか
秘書　――――――――　山木眞綾
弁護士　――――――――　有田哲
医者　――――――――　脇田唯〈客演／ＰＯＳＴ〉
刑事　――――――――　田邊幸代
工場長　――――――――　中村雷太
工員　――――――――　檜山真理世
漁師　――――――――　伊達昌俊
記者　――――――――　宮森峻也
旅人　――――――――　佐藤智子
先輩芸人　――――――――　高橋寿樹
後輩芸人／教師　――――――――　佐藤理紗

【スタッフ】

作・演出　小佐部明広
舞台美術　高橋詳幸（アクトコール株式会社）
照明　高橋正和
音響　小佐部明広
衣裳　大川ちょみ
小道具　佐藤理紗
宣伝美術　メイケ祥子
制作　小川しおり（劇団fireworks）
主催　クラアク芸術堂企画運営員会
共催　㈱札幌副都心開発公社、北海道演劇財団
制作協力　ダブルス
後援　札幌市

【日程】２０１９年８月２３日（金）１９時
８月２４日（土）１４時／１９時
８月２５日（日）１２時／１６時

【会場】サンピアザ劇場

【料金】一般前売　２，５００円　２５歳以下前売　１，５００円
高校生以下　５００円　早割　２，０００円
当日券　各５００円増

※実際の上演内容と一部異なる場合があります。ご了承ください。

《『クレナイの街』の上演について》

「前売入場料２０００円未満」または「公演予算１００万円以下」の場合は、脚本使用料は**無料**です。それ以外の場合は、協議の上、総予算の３％程度を脚本使用料とします。上演のお問い合わせはクラアク芸術堂企画運営委員会まで。

【クラアク芸術堂企画運営委員会】
clark.artcompany@gmail.com

２０１９年８月１９日　第１刷制作

小佐部 明広（こさべ あきひろ）

１９９０年、札幌生まれ。北海道大学法学部卒業。２０１１年に「劇団アトリエ」を結成し、２０１７年に「クラアク芸術堂」に組織変更。人間の暗部ややりきれない部分を書くことが多いが、コメディやナンセンス、ファンタジーなど作品のジャンルは多岐にわたる。２０１７年から平仮名名義「こさべあきひろ」としての執筆活動も開始。『瀧川結芽子』で若手演出家コンクール２０１５優秀賞。

クラアク芸術堂ホームページ
http://www.clark-artcompany.com